

地域連携で創る図書館授業の展開 — 「地域と図書館」の紹介 —

池田裕子・鏡山 樹

●要約

稚内北星学園大学は、2010（平成22）年度より図書館情報学課程を開設した。この課程では、司書および司書教諭（教員免許状取得者を基礎資格とする）の養成を行う。本稿で紹介する「地域と図書館」は、図書館情報学課程を履修する学生が最初に受講する入門科目である。

この授業の目的は、図書館業務の全体像を把握することであり、本大学図書館および稚内市立図書館との連携が特徴である。「知識基盤社会」⁽¹⁾における地域住民の生涯学習への対応という課題を担う公共図書館の重要性が増す昨今、本報告では、理論と実践のバランスをとりながら展開している授業「地域と図書館」のこれまでとこれからを検証し、より効果的な授業づくりを目指すための課題を明らかにした。

●キーワード

実践的な授業

公立図書館と大学との連携

司書による授業

● 章節構成

はじめに

- ・「地域と図書館」の構成と特徴
- ・授業実践とその効果、課題
- 1. 導入（第1回～第2回）
- 2. 具体的業務（第3回～第14回）
 - 2-1 ITのセッション（第3回）
 - 2-2 分類のセッション（第4回・第6回）
 - 2-3 移動図書館のセッション（第5回）
 - 2-4 レファレンスサービスのセッション（第7回～第9回）
 - 2-5 選書のセッション（第10回）
 - 2-6 児童サービスのセッション（第11回～第14回）
- 3. まとめ（第15回）
 - ・評価
 - 1. 学生による授業評価アンケート
 - 2. 教員による評価

おわりに

はじめに

稚内北星学園大学は、情報メディア学部情報メディア学科を擁する単科大学として2000（平成12）年に誕生し、2009（平成21）年には同学部に地域創造学科を開設して2学科制となった。

2010（平成22）年には図書館情報学課程を開設したが、これは、2008（平成20）年8月30日に公布された改正図書館法（法律105号）が背景となっている。同法改正の骨子は、情報化社会への対応として、図書館で扱う資料に電子媒体の取り扱いが加えられたこと、「学社連携」への対応、従来講習による司書資格の取得を中心としていた司書の養成方法を大学の課程における養成を第一義とするものへと変更したこと、地域住民への情報開示の促進である。それに伴い公布された改正図書館法施行規則（2011（平成23）年12月1日文科科学省令第43号）で定められたカリキュラムの特徴は、改正図書館法の具体的運用として、ICTスキルの向上を企図した大学カリキュラムの変更が掲げられている。

情報化社会への対応という観点からは、1987（昭和62）年に本大学の前身である稚内北星短期大学が開学して以降、同短大の経営情報学科で蓄積した情報技術とそれを織り込んだ教育課程と整合するものであり、これを基礎として時代が求める司書養成を可能にする。そして、このことは本大学に課せられた新たな社会貢献でもあった。

日本初の情報メディア学部を開設した大学として、本大学では、情報メディアにおける不可欠の構成要素である図書館についての講義を開学時より開講している。当初は、「図書館とメディア」と称していたこの講義は、書物の誕生から電子メディアの特性に至るまでの歴史的経緯を中心に学ぶ、情報メディア学科における教養科目的な位置づけであった。地域創造学科の開設に伴い、教職課程と社会教育主事課程を置く本大学と所在地稚内市の教育委員会・稚内市立図書館との連携を基軸として、「学社連携」をキーワードとした実践的な取り組みを可能にする体制を整え、「図書館とメディア」を「地域と図書館」としてリニューアルした。さらには、2012（平成24）年4月1日の改正図書館法施

行を見据えて授業内容の見直しを行った。

ここでは、配当年次を3年次から1年次に移動し、理論を中心とした内容から実践を取り入れた内容へと変更した。図書館業務の概要と実際を履修者に理解させ、上級年次の各論的な授業へと繋げる総論的な役割を果たす授業としての調整を続けて現在に至る。

こうした情報化への対応に加えて、2011（平成23）年8月30日には、地域の自主性および自立性を高めるための改革の推進を図るための関係法律の整備に関する法律（法律第105号）が制定されるなど、地方分権推進の動向も存在する。

本学における図書館情報学課程の開設は、内外におけるこうした条件下において進められたものであり、情報化と図書館行政における地方分権化という二つの要請に応え得る人材の養成を重要な役割としている。

本課程では、これからの図書館行政を担う新しい司書として求められる力量を育成できるような授業の内容構成を心掛けている。今回紹介する「地域と図書館」は、来年度施行の改正図書館法に基づくカリキュラム変更により、従来の「図書館制度・経営論」と統合され、「図書館概論」・「図書館概論」として生まれ変わる事となる。本稿では、これを機に、開講3年目を迎えた「地域と図書館」におけるこれまでの取り組みと今後の課題について総括的に検討し、司書を養成する授業の在り方について考察することを目的とする。

I. 「地域と図書館」の構成と特徴

先にも述べた通り、この授業は図書館についての基礎的な知識のほかに、図書館の利用方法から司書の日常業務に至るまでの知見を概括的に身につけるものである。図書館業務について包括的に理解することで、地域社会のなかで図書館がどのような役割を担っているのかを把握し、生涯学習社会における地域住民の自学を援助する重要な役割を司書が担っていることを認識させることが目標である。業務内容を通してその仕事の重要な意味を理解するというこの授業の姿勢は、大学におけるキャリア教育の一環として考えることもできる。

対象は、司書、司書教諭の資格取得を目指す学生、社会教育主事の資格、教員免許状の取得を目的とする学生、又はこれらの業務内容に興味関心を寄せる学生である。本大学の図書館情報学課程の講義は、学部の性格上卒業単位として認定されるため、必ずしも資格取得を目的とする学生だけが履修するわけではない。

また、授業の性格上、一人の講師が担当する方法はとらない。特に、図書館業務の実践的内容を扱う場合には、大学の専任教員よりも実務経験の豊かな司書の方が適しているため、大学図書館の司書、稚内市立図書館の司書も必要に応じて講師として登壇している。

次に構成であるが、授業の第1回目および第2回目では、総論的な導入を行う。ここでは、図書館の諸機能の一つである自己学習のための施設としての位置づけを明確にするとともに、図書館員の業務の全体像を把握することを目指す。

第3回目からは具体的な図書館業務について学習する。この回にICTの役割を入れたのは、改正図書館法の意図を理解させるためである。第4回目からは、資料の収集、分類および目録整備、貸し出し、返却、移動図書館（自動車文庫）などの業務について一通りの知識を身に付け、第7回目から

はレファレンスサービスの基礎のほか、サービスの実際（資料検索）を演習を通して学び、理解を深める。第10回目は、選書についての考え方と実際の業務内容について学ぶ。

第11回から第14回にかけての4回を児童サービスのセッションとしていることは、この授業の特徴である。これは、近年子どもの活字離れが問題視され、2001（平成13）年12月12日に制定された子どもの読書活動の推進に関する法律（法律第154号）以降、国と地方公共団体との双方の責任において読書活動の推進が行われていることのほか、本学の所在地である稚内市が子育て推進運動30年の歴史を有しており、「2002（平成14）年度に全国に先がけて『こども課』を設置している」⁽²⁾ 経緯から、市立図書館においても児童サービスを重視しているという地域的特色を踏まえてのことである。

生涯学習という観点に立てば、生後7ヶ月以降の乳児に絵本を読み聞かせるブックスタートに始まる良本との出会いは、その一生の学びに影響を与える可能性のある貴重な機会というべきものであり、図書館業務のなかにおいてもとりわけ重視すべき分野である。

第15回目（最終回）では、授業の締めくくりとして、稚内市立図書館の館長をお迎えして、「学社連携」の鍵となる公共図書館と学校図書館の連携についての講話をいただく。地域にとっての図書館とは何か、公共図書館と学校図書館の役割とそれぞれの連携がどのような学習効果をもたらすのかについて、将来の見通しも含めて行政側からの観点を学ぶことにより、「地域と図書館」の在り方について個々の学習によって得た知見をさらに深める回である。

【資料1】「地域と図書館」シラバス

- 第1回 ガイダンス 社会教育施設としての図書館
- 第2回 図書館職員の役割（稚内北星学園大学図書館職員）
- 第3回 図書館業務におけるITの役割
- 第4回 主題分類概説（稚内北星学園大学図書館職員）
- 第5回 貸出業務 移動図書館「ぶっくん」来校
- 第6回 主題分類演習（稚内北星学園大学図書館職員）
- 第7回 レファレンスサービス（1）総論
- 第8回 レファレンスサービス（2）情報検索演習（稚内北星学園大学図書館職員）
- 第9回 レファレンスサービス（3）パスファインダー制作実習（稚内北星学園大学図書館職員）
- 第10回 公共図書館における選書の考え方・選書実習（稚内市立図書館職員）
- 第11回 児童サービス（1）総論
- 第12回 児童サービス（2）読み聞かせ概論（稚内市立図書館職員）
- 第13回 児童サービス（3）読み聞かせ実習（稚内市立図書館職員）
- 第14回 児童サービス（4）展示（稚内市立図書館職員）
- 第15回 公共図書館と学校図書館の連携（稚内市立図書館館長）

II. 授業実践とその効果、課題

以下では、導入、具体的業務、まとめの3段階に分けて、授業内容の紹介を行う。学生の提出課題

を資料として、この授業の概要と課題について述べる。

1. 導入（第1回～第2回）

■ このセッションのねらい

図書館は、社会教育施設である。第1回目では、社会教育と学校教育の違いに始まり、地域における生涯学習の支援を担う公共図書館の社会的使命についての理解を深めることを目指す。

第2回目は、図書館職員の業務が多岐にわたること、業務の性格上専門性が求められる職種であることに「気づくこと」をねらいとした。

■ 中心的な内容

第1回目では、社会教育法以下、各関係法令の解説を行った後に、生涯学習社会における図書館員の活動の意義について理論的アプローチを行った。必要な情報が次々と現れては消える環境下においては、学校教育を卒えた後も必要な情報を自分で探し出し、学ぶ態度を身に付けなければ、知らないことが自らに不利益をもたらしてしまう恐れがある。導入段階では、地域の生涯学習センターとしての公共図書館の役割と、自ら学ぶ地域住民の学習を支援する司書の意義について学んだ。

第2回目は、図書館員の業務について、図書館法に基づく形で全体的な説明を行った。

図書館職員として重要なことは、「利用者を知ること」である。利用者1人1人とコミュニケーションをとり、利用者の真の要求、つまり利用者が何を知りたいのかを的確にとらえることが重要である。そのためには日常の対話の記録、利用者の調査が必要となる。

「資料を知ること」も重要である。資料をよく知り、客観性をもった価値判断ができること、図書館員として当然備えるべき基本的な資料についての知識を身につけ、たえず出版情報に目を向けておくことが必要となる。

そしてこれらの能力を集大成する図書館職員の最大の役割として、「利用者と資料とを結ぶ」ことがあげられる。利用者を知り、資料を知ることによって利用者のベストの選択（選書）をおこなうことが可能となる。これらを実現するために、図書館職員は研修に努め、常に専門性を磨かなければならない。

今回から、図書館員の業務の前提となる著作権について新たに取り上げた。図書館法に基づく業務の解説を行った後、事例を交えながら図書館業務と著作権の関係について学び、理解を深めた。

そのほか、司書が意外に体力の要る職業であることを実感してもらうため、図書の重量当てクイズを行った。これはレファレンスブックを含めた書籍を収めた段ボールを実際に学生に持たせ、中に何冊の書籍が入っているかを当てさせるクイズである。この時は、24冊を入れていたのだが、ほとんどの学生は40冊～50冊の間の回答であった。司書の仕事は重労働であることを改めて確認することができた。

このセッションにおける課題は、「今まで思い描いていた図書館と、この授業で学んだ図書館について違いがあったか、あれば書きなさい」というものである。このうち、代表的なものを以下に資料としてあげておく。

1年 T

地域と図書館の講義を受講する前に私が思い描いていた図書館での仕事というのは、本の貸し出しや返却、それから利用者から本のリクエストを受け付けるということだった。

しかし、この講義を実際に受講してみて新たにわかったことがいくつかある。それは、図書館での仕事には様々な種類があり、力仕事もこなさなければならず、覚えなければいけないことも数多くあるということだ。さらに図書館で働いている人の中には、司書資格を持たずに仕事をしている人もいるということがわかり、衝撃を受けた。また、一般書籍の他に郷土資料、地方行政資料、レコードやフィルム、さらには美術品も収集していることも学ぶことができた。そして情報機器活用能力を身につけ、常に最新の情報を求め続けることが重要であると知り、日頃から新聞を読むことやニュースを見たりすることは当たり前の行動なのだと感じた。

情報機器を扱うことができなかつたり、情報の収集方法がわからない司書は必要のないことを学び、パソコンを始めとする様々な情報機器に強くならなければいけないと思った。司書にしかできない仕事もあるということも学んだ。それは利用者と資料を結びつけることである。利用者や資料を知ることで、利用者にとって最高の選択をすることができるのは、まさに司書にしかできない仕事だと思った。また、レファレンスサービスといった図書館の職員が資料について知識を持ち、利用者の質問に答えることも図書館の仕事だと学ぶこともできた。

また、図書館は著作権と深いつながりがあり、著作権についての知識と、最新の動向に目を向けることが重要であることも知ることができた。実際に図書館を移動させて、市街地より遠方の地域を巡回し、サービスをして回る移動図書館もあることを知った。普段図書館に行くことが困難な子供たちにとって、身近に本というものを感じるこのような活動は、とても素晴らしいサービスであると感じた。さらに、読み聞かせや、DVD鑑賞会を開くことは子供たちにとって、大変興味を惹かれる活動なのではないかと思った。そして子供たちがこのような活動に興味を惹かれ、積極的に図書館に足を運ぶようになり、本を好きになっていって欲しいと強く思った。

これからの講義を受講していくなかで、様々な図書館についての知識を学び、沢山吸収していきたいと思った。そして偏りがなく、様々な知識を持ち、多くの利用者が安心して活用することができる図書館に勤める素敵な司書になりたいと強く感じた。

学生のレポートには、共通している点がある。それは講義を受ける前は「司書は楽な仕事」と思っていたことである。今まで利用者として司書に接した場面では、主に貸出・返却に代表されるカウンター業務が目についただろう。しかし、この授業を受けることにより、司書には利用者の相談、図書館資料の相互貸借、読書会の開催や資料の展示などの様々な業務があることを理解した。

また、利用者と資料を結びつけること、そのために常に専門性を磨くことの重要性についてはどの学生のレポートにも触れられており、講義担当者の意図するねらいは概ね達成できたのではないかと考える。

課題としては、今回著作権という新たな単元を増やしたことにより授業のボリュームが増え、駆け足になったことである。次回以降は内容を精査して、めりはりのある展開を心掛ける必要がある。

2. 具体的業務 (第3回～第14回)

2-1 ITのセッション (第3回)

■ このセッションのねらい

図書館における情報化への対応として必須事項であるITの役割について具体的な理解を深めるとともに、図書館が情報化を進めるのは、あくまで利用者に便利に使ってもらうためであることに「気づくこと」をねらいとした。

■ 中心的な内容

現在の学生が普段から親しんでいる本の背面に添付されたバーコードと図書館業務システム、インターネットOPACシステムを示し、続いてそこに至るまでの帳簿目録やカード目録の歴史を解説した。これにより、図書館がどのような目的で業務を行っているのか、その業務を行う上でなぜ情報化を進めなければならないのかを、理解することを目標とした。さらに、国立国会図書館のジャパニーズ・ブック・ダムを事例として、近い将来・遠い将来へ向けて図書館が行っているプロジェクトや実験の数々についての解説を行った。

2-2 分類のセッション (第4回・第6回)

■ このセッションのねらい

図書館員の中心的な業務の一つである資料の分類について、ひと通りの手順と方法を身に付けることを目標とした。コンピュータを駆使した情報収集力の在り方が業務遂行に大きな影響を及ぼすことに気づき、普通の大学の授業と図書館業務との深い関係を理解する。

■ 中心的な内容

第4回では図書館資料のうち、書籍に分類番号を自力で付与する実習を行った。実習にあたり、日本国内の図書館で広く利用されている「日本十進分類法」の構造を理解し、使うことができるようになることを目標とした。今年度の日本十進分類法は、第3次区分までとし、細目には触れなかった。細目については、3学年次担当の「情報資源組織論」で扱う。

実習は、本学図書館の蔵書から6冊を選び、その分類番号を考えた。なお、実習中は日本十進分類法の書籍を参考にすること、図書館内にある書籍の分類番号を参考にすることは認めたが、インターネットの利用は認めなかった。学生自身がインターネットで得た検索結果に頼らずに考えることが重要であることと、事前に分類番号を知ることにより、先入観を持たせるのを防ぐためであった。以下は、学生の回答の一部である。



【写真1】分類作業に取り組む様子

— 【資料3】 学生による分類作業の事例（一部抜粋） —

藤澤房俊『シチリア・マフィアの世界』講談社、(2009年)

妥当な分類は368「社会病理」と設定。

分類 368

選んだ理由 ・社会が病んでいる。

分類 313

選んだ理由 ・歴史と社会学で迷ったが、歴史ではなさそうだと判断した

分類 237

選んだ理由 ・目次をみて誕生があるので、歴史だと思う。
・まず目次をみると誕生から現代のことまでが書かれているので歴史。かつイタリアについて焦点が当てられているので。
・イタリアの歴史のようだから。

分類137

選んだ理由 ・シチリア人の心理的メカニズムやマフィアの本質などが書いてあったから。

竹内弘行『十八史略』講談社、(2008年)

妥当な分類は222「アジア史(中国)」と設定。

分類 222

選んだ理由 ・主に中国の様々な戦争が書かれていると思ったから、歴史の中国に該当するところだと思ったから。

・タイトル、目次の中に「歴史」「時代」などと書かれているので歴史。秦、漢なども書かれているので中国。よって222

- ・歴史でアジア史の中国だから。
- ・歴史・中国というキーワードより。

藤木久志『戦国の作法』講談社、(2008年)

妥当な分類は210「日本史」と設定。

分類 210

- 選んだ理由
- ・歴史なので2、日本史で1なので210。
 - ・日本の村にどのようなルールがあったが書いてあったから。
 - ・歴史のもので日本史で、日本全体だと思ったから。

分類 384

- 選んだ理由
- ・318, 312と迷ったが、社会、家庭生活の習俗の方が近いと思ったから。
 - ・目次を読んでも、歴史と言うよりも、その時代のある物事について詳しく書いてあったので、そうだと思った。
 - ・「作法」というワードから民俗学を連想したので38?までいき、作法は社会生活に含まれると思ったから。

書籍の分類については、学生一人一人が悩みながらではあるが、自分なりの分類番号を付与することができた。出題者の妥当と判断する分類番号にたどりつかない学生もいたが、独自の見解を述べさせた。

学生の課題を確認すると、一つの主題に対して様々なアプローチが見られた。学生による分類番号の付与は時には主観に偏るものもあり意見が分かれたが、NacsisWebcat の分類を基準として考え方の解説を行った。

第6回では、コンピュータを使って分類の参考となる情報を収集する場合に必要な件名(キーワード)について扱った。利用者が特定の資料を探す際に、適切な件名をコンピュータに入力することができないと求める資料を探し出すことができない。そのため、今年度からは、的確な件名を考える実習も取り入れることにした。

件名の付与については、コンピュータ実習室を使って Web NDL Authorities を利用し課題に取り組ませた。Web NDL Authorities とは国立国会図書館が維持管理する典拠データを検索できるサービスであり、ウェブ版の国立国会図書館件名標目表として利用できる。

最初は予備知識のない状態で、次の段階では、実際に Web NDL Authorities を駆使して、最初と同じ課題に取り組ませた。同サイトを介在させた結果、1回目と2回目の検索ワードが変化していることがわかる。

【資料4】学生による主題設定の事例

- 問題 日本で作られている電力にはどのような種類のものがあり、その割合はどのくらいか調べたい。あなたはどのようなキーワードを使いますか？

Aさん

- 1回目 日本 発電所 種類 数 割合
- 2回目 電力 発電 割合 種類 経産省

Bさん

- 1回目 発電 電力 発電量
- 2回目 電力系統 発電 エネルギー 電力 動力

Cさん

- 1回目 電力 割合 種類
- 2回目 火力 波力 水力 風力 割合

問題 行列の本を買いたい。あなたはどのようなキーワードを使いますか？

Aさん

- 1回目 行列の本 最近の行列の本
- 2回目 エス・マトリックス 行列式 行列力学 待ち合わせの理論 待ち行列研究会

Bさん

- 1回目 行列 本 人気
- 2回目 数学 行列 行列式 エス・マトリックス 本

Cさん

- 1回目 行列 並ぶ おもしろい 大学生 長い
- 2回目 線形代数学 行列数学 数学C 行列 マトリックス

1回目は漠然とした思いつきで設定した件名であったが、Web NDL Authorities を使うことで語彙も増え、より適切な件名を設定することができた。

コンピュータを使用するこのような場面では、学生たちは生き生きと実習に取り組む。本学は情報メディア学部であるため情報機器の取り扱いに興味がある学生が多いことと、高校の教科(情報)でコンピュータに慣れ親しんでいることもあり、年々コンピュータ実習を苦にする学生は減っている印象である。

しかしながら、この課題はコンピュータ操作に長けているからといって完成できるものではない。

例えば、課題を確認すると、1回目と2回目の件名の設定がほとんど変化しなかった学生が一部ではあるが見受けられた。これは、現時点におけるその分野に関する知識量の少なさに加えて、その分野にアプローチするためのメタ情報を収集するという力量が未形成で、且つ件名付与の意味づけが理

解できずにいるケースである。

この課題を解決するには、分類のセッションの構成を見直し、何のための件名かということについても十分に説明を行ったうえで実習に移ることが必要である。

2-3 移動図書館（自動車文庫）のセッション（第5回）

■ このセッションのねらい

図書館は、建物に限定されない。図書館法では、土地の事情による自動車文庫の巡回について規定している。このサービスは、あらゆる地域において図書館活動を行う観点から実施されており、とりわけ広い範囲に人口が分散している稚内市にとっては重要な市民サービスの一環として機能していることを理解する。

■ 中心的な内容

稚内市立図書館に依頼して、移動図書館「ぶっくくん」を大学玄関前に停車していただき、学生が実際に乗車した。館長およびドライバー兼図書館員のご協力により「ぶっくくん」本体についての解説（蔵書の傾向、巡回の地区など）をしていただいた後、学生が実際に貸し出しデモンストレーションを行った。

一通り見学を終え、教室に移動した後、図書館長への質疑の時間を設けた。特に情報メディア学科の学生からは、資料のコンピュータ管理の手法について、専門的な質問が提示された。

「ぶっくくん」来校は、2年がかりの調整の結果である。巡回スケジュールが混むなかで、土曜日の午前中という特別枠の設定をしていただくことにより実現した。通常、「地域と図書館」は、水曜日の4限目（14時20分から15時50分まで）なのだが、この時ばかりは変則となった。しかしながら、ほとんどの学生が出席した。



【写真2】ぶっくくん来校の様子

2-4 レファレンスサービスのセッション（第7回～第9回）

■ このセッションのねらい

ここでは、図書館員の日頃の研鑽が最もわかりやすい形で表れるレファレンスサービスの概要について学び、インターネット上に存在するさまざまな情報源の使い分けについて理解することを目標とした。学んだ知識を演習によって強化し、必要な資料を見つけ出す方法を習得した。

■ 中心的な内容

第7回目は、レファレンスサービスに関する基本的な用語解説、レファレンス業務、すなわち情報自体を提供する直接業務と、効率的な情報検索のための準備としての間接業務の概要に加えてレファレンスインタビューの方法について学んだ。レファレンスインタビューでは、利用者の本当に知りたいことにアプローチするさまざまな質問を行うのだが、このことは、利用者教育の側面も兼ねていることを理解できるようにした。図書館員は幅広い知識を必要とすること、知らないことにアプローチする方法を体得していなければならないことを実感する授業である。

第8回目はデータベースの取り扱いに焦点を絞り、図書検索や雑誌検索の方法、機関リポジトリについて学んだ後、実際に文献検索実習を行った。無数にある情報源の中で信頼性のある情報を的確に引き出し利用者に提供できる能力は、図書館で働く上で必須のスキルとなる。この講義では、基本となるデータベースを紹介し、そのデータベースを利用して効率よく情報を集約する技術を自ら体験し、習得させることに努めた。

第9回目は講義のまとめとしてパスファインダーの作成に取り組んだ。パスファインダーとは、ある特定の主題に関する資料や情報を収集するための手順をまとめたツールのことであり、現在では紙媒体だけでなく、インターネット上でも公開されている。

この作業は、調べるテーマを設定した後、主題、参考・関連図書、雑誌記事、新聞記事、関連Webサイトを年齢層にあわせて設定する必要があるし、レファレンスサービスのまとめの授業としては適切であると考えた。パスファインダーの作成は、事前に用意されたプリントの空欄を埋める形で簡易版を作成した。

資料5を提出した学生は4年生で、卒業論文を意識して課題に取り組んだ。そのためそれぞれの設定が比較的絞られているのが特徴である。ただし、雑誌については基本的な書誌情報が抜けていたため、事後指導をおこなった。

【資料5】パスファインダー制作実習 レポート課題

4年

1. テーマ 数学
2. キーワード 代数学 整数論 教え方
3. テーマの分類、キーワードの分類 411 412 375
4. 図書

NDC	書名	著者	出版社
412	整数論入門 代数からのアプローチ	横井 英夫	サイエンス社

411	親切的な代数学演習 整数・群・環・体	加藤 明史	現代数学社
375.41	数学教育法 中学・高等数学における基礎基本	樋口 禎一	星雲社

5. 雑誌 (タイトル) 代数学シンポジウム報告 津田塾大学数学・計算機科学研究所報
教育学論説資料 (第4・5分冊) 教育方法/日本教育方法学会

6. データベース

名 称	URL
books.or.jp	http://www.books.or.jp/
Nacsis Webcat	http://webcat.nii.ac.jp/

文献検索演習では、LMS を利用した。LMS (Learning Management System) とはeラーニングの実施に必要な学習管理システムである。この実習は LMS 上にアップされている課題を確認し、課題に取り組んだ結果をレポートにまとめ LMS 上に課題を投稿する形で進めた。

学生から提出された課題のうち、解答に使用した Web サイトに着目した。文献検索を行う際にどのようなアプローチで情報にたどり着くかが重要だからである。

【資料6】提出課題 解答集計結果 (課題提出学生数27名)

1. 下記に記載した書籍について調べなさい。調査項目は著者、価格、ISBN とする。またどのように回答を導き出したかその方法を答えなさい。

- (1) 『図書館学基礎資料 第9版』樹村房
- (2) 『哲学の謎』講談社
- (3) 『地球環境都市デザイン： Sustainable urban design』理工図書
- (4) 『複雑さの帰結 複雑系経済学試論』NTT 出版
- (5) 『日本の白書 平成8年 わが国の現状と課題』清文社
- (6) 『トラウマの果ての声』群像社

- ・ゆにかネット 5
- ・google 4
- ・webcat 10
- ・amazon 11
- ・books.or.jp 10
- ・その他 1
- ・回答なし 2

(複数回答も含む)

2. それぞれの書籍について、本学図書館、稚内市立図書館、北海道立図書館、北海道大学図書館にあるかどうか調べなさい。

- ・所蔵調査については使用する Web サイトは一通りしかないので、結果は割愛する。

3. それぞれの書籍について、どこの大学図書館に所蔵されているか調べ、正式名称と住所を答えなさい。検索件数が多い場合は3カ所の図書館を調査対象とする。またどのように回答を導き出したかその方法を答えなさい。

- ・ webcat 24
- ・ 回答なし 1
- ・ その他 2

4. 下記に記載した雑誌について、詳細な書誌情報を調べなさい。(出版地、所蔵図書館など) またどのように回答を導き出したかその方法も答えなさい。

- (1) 『おもちゃの図書館全国情報』
- (2) 『北海道における農村地域工業など導入地区の概要』
- (3) 『Archives of the Kohno Clinical Medicine Research Institute』

- ・ webcat 26
- ・ 回答なし 1

5. それぞれの雑誌についてどこの大学図書館に所蔵されているか調べ、正式名称と住所を答えなさい。検索件数が多い場合は3カ所の図書館を調査対象とする。またどのように回答を導き出したかその方法を答えなさい。

- ・ webcat 26
- ・ 回答なし 1

6. 下記に記載した雑誌論文について書誌情報を調べなさい。またどのように回答を導き出したかその方法も答えなさい。

- (1) 「情報技術の進展と企業行動の変化」
- (2) 「樺太における高等女学校の修学旅行--樺太庁豊原高等女学校を中心に」
- (3) 「Struts の代替としての JavaServerFaces の検証」
- (4) 「An assessment of document clustering based on KNMF algorithm applying Hadoop」

- ・ cinii 20
- ・ webcat 1
- ・ google 3
- ・ NDL-OPAC 2
- ・ 回答なし 2

(複数回答も含む)

1. の回答に当たっては、さまざまな検索方法で回答を導き出している。出題者の意図は事前に配布したプリントの中では books.or.jp を紹介し、利用させることを目的とした問題だったが、google 検索を用いた学生が多かったことと、NacsisWebcat (総合目録データベース www 検索サービス) を利用して回答を導き出した学生が目立った。

3.4.5. については事前に配布した資料の説明で NacsisWebcat を利用することで情報源にたどりつくことができることを説明していた。この問題については所蔵調査館を大学図書館に限定したこと

もあり、NacsisWebcat の利用が多いことがわかる。

6 .の問題は cinii (「日本の論文をさがす」) を利用することで雑誌論文の検索が便利になることや本学教員の著作物に触れてもらう意図があった。回答方法はほぼ cinii を利用している。

昨年度まではレファレンスサービス⁽¹⁾ でデータベースの講義を行い、レファレンスサービス⁽²⁾ で文献検索演習を行ったため当日中に課題を完成させる学生が多かったが、今年度は自動車図書館来校のスケジュールの都合上データベースを取り扱う講義が一コマとなり、講義・実習を一コマにしなければならなかった。そのため実習時間が減少し、課題については宿題にせざるを得なかった。

次年度は検索実習の時間を増やす工夫をし、授業時間中に学生への指導が行き届くように改善を図りたい。

2-5 選書のセッション (第10回)

■ このセッションのねらい

第10回では、公共図書館における資料の選択基準について理解することを目標とした。

■ 中心的な内容

「稚内市立図書館資料収集方針」(2004年8月20日発行) を資料として、当該図書館における選書の基準を説明していただき、大学図書館を始めとする他の図書館との違いを理解できるようにした。稚内市の人口構成、利用者の状況などを基礎データとして、購入すべき資料が決定されること、限られた予算のなかで、いかに市民のニーズに対応できるかが図書館員の技量であることを学んだ。

また、実際の選書の際に必要な図書館専用在庫・納品システムについても解説していただいた。

2-6 児童サービスのセッション (第11回～第14回)

■ このセッションのねらい

第11回目は、児童サービスの全般について学ぶ。第12回目は、児童書の選書と絵本の読み聞かせ技術を学んだ後に、読み聞かせを実際にイベント化することを目標とした活動を行う。第14回目の展示は、図書館の児童書コーナーなどにある書籍の紹介用ポップを作成する。このセッションにおける隠れたねらいは、学生のコミュニケーション能力の向上にある。学生の希望によらず授業者によって人為的に編成されたグループの中で話し合いにより役割分担をして一つのイベントを行うことは、学生にとっては簡単なことではなかった。

■ 中心的な内容

第11回では、人間の発達段階の理解に始まり、絵本の選書、本との出会い、子どもと本を結びつける取り組みとして外すことのできない読み聞かせなど、児童サービスの全般について学んだ。第12回・第13回は、児童書の選書基準、コレクションの年齢別構築方法に続き、絵本の読み聞かせを行う際の技術(本の準備、絵本の持ち方、ページのめくり方、読み方など) 指導を受け、子ども相手の読み聞かせを想定したイベントの構成と実演を行った。ここでは、6つのグループにわかれて、1グループにつき10分という時間を設け、話し合いのなかでテーマを設定して、読み聞かせプログラムの作成と実演を行った。

【資料7】読み聞かせプログラムの実演例

テーマ：冬

実演者：5名のグループ（司会1名、読み手4名）

絵本1：中川李枝子『ぐりとぐらのおきやくさま』福音館書店、1967年

絵本2：木村大介『森のクリスマス』ベネッセ、1994年

対象年齢：3歳程度

このグループは、事前練習をしっかりと行い、司会もめりはりがあったスムーズであった。楽しい文章と親しみやすい絵は、幼児が楽しく集中できるものであろう。このグループのメンバーは、役割を決めたうえで、演劇調で絵本を演じていた。このように工夫が見られたグループがあった反面、練習が明らかに不十分なグループもあり、濃淡が比較的明確に現れた。



【写真3】絵本の読み聞かせ実演

当初、学生たちは、ミニイベントの実施について軽く考えていたようであったが、実演してみて、人に見られるということの大変さを実感したようである。司会の重要性はもちろんであるが、読み手の立ち位置、発声、視線全てが注目的となる。選書の善し悪しはもちろんのことであるが、子ども相手に飽きさせない方法を工夫しなければならないなど、課題が山積であった。グループの中には、ペープサートを準備したところもあったが、全体的に、練習量の少なさが目立った。めりはりのある練習時間を設定することは、次回の課題であろう。2年次に配当されている必修科目「児童サービス論」では、実際に子どもの前で読み聞かせを行う実習があることから、この経験を生かして欲しい。

第14回では、大学図書館でテーマを設定し、文献を紹介するための展示を行った。ここでも限られた時間でグループワークを行い、一つの成果を出すことを要求された。この活動もグループ内での段取り、作業の分担などの役割が課せられる。展示作品は、そのまま図書館に展示し、他の学生の目に触れるようにした。



【写真4】学生による展示作品

児童サービスのセッションでは、表現者としての司書という側面のほかに、チームで一つのタスクを担うという、図書館員としては当たり前ともいえる仕事の仕方について体験させた。学生たちは、ここでも図書館員が高いコミュニケーション能力を要求される仕事であることを改めて実感したようである。よい意味で、司書のイメージを覆す機会になった。

3. まとめ（第15回）

■ このセッションのねらい

これまで学んだことの総集編として、稚内市立図書館館長から「公共図書館と学校図書館の連携」についての講話をいただいた。図書館の今後の在り方について考えることがねらいである。

■ 中心的な内容

第1回目のガイダンスで話した図書館の法的根拠について再度確認し、読書活動にかかる取り組みとして、稚内市の事例を紹介した。その後、生涯学習社会における図書館の意義について、趣味の文献についてのコレクション構築について最近の稚内市立図書館の傾向について解説していただいた。最後に日本の図書館の現在置かれている状況を理解するために他国との比較を行い、今後の図書館行政の課題に触れた。

この授業は図書館で働く司書の仕事内容の具体的理解と、今後の職業選択に役立つキャリア教育の側面もあることは既に述べたが、実際に司書になるためには大学で司書資格取得のための単位を取得し、かつ、公務員試験を突破することが必要である。しかしながら、たとえその条件を充たしたとしても必ず司書になれるとは限らないこと、それでも、司書資格は取得しておくに越したことはないこと、司書に求められる技術というものは汎用性が高いものであることを併せて館長から伝えていただいた。

Ⅲ. 評価

1. 学生による授業評価アンケート

授業の最終日に行った「授業評価アンケート」では、以下のような感想がみられた。

【資料8】学生の感想

- ・この講義を受講することによって、図書館についての様々な知識を学ぶことができました。これから先、図書館司書の資格を取得することが出来るように頑張りたいと思いました。
- ・「地域と図書館」の講義全体を通して、司書の仕事は思っていたのと違う部分があったり、思っていたよりも大変だと感じた。読み聞かせでは、これからの児童サービス論に役立つところがあったととても勉強になった。
- ・司書の仕事は思っていたものと違いましたが、頑張っ資格をとろうと思いました。
- ・「ぶっくん」は、講義で初めて乗りました。内容が分かって良かったです。
- ・全体的にやさしい内容でした。もっと演習や課題が多くてもいい。施設見学や職場体験ができるのもっといいと思う。
- ・日本十進分類法が学べて良かった。
- ・図書館というものは身近にあって普段から利用もしていたが、このように内部までは知ることはなかった。さらには読み聞かせ、本の展示の仕方など、たくさんのことを教えてもらいました。
- ・始めはもっと楽なのだろうと思っていたが、以前経験した職場体験で学んだこととは違い自分の今後、就活などで必要なことを学びました。今まで以上に図書館について学んでいこうと思いました。
- ・この授業で図書館がどのようなことを行っているのかを知ることができて良かったと思います。
- ・本が好きなのでこの授業を取りました。授業で図書館についての知識が増え、勉強になりました。今後も図書館についてもっと知りたいです。
- ・「司書」という資格について、何も知らなかったが、かなり理解が深まったと思う。「ぶっくん」について、稚内にいながら利用したことも、ましてや見た事すらなかったので貴重な時間となった。また、外部講師の話も非常にためになった。

実践的な授業内容に切り替えて3年目を迎えた今回の授業は、幾つかの課題は残しながらも概ね一つの完成型に近づいているようである。ただし、既に述べたように、この授業は図書館員になりたいと思っている学生だけが履修するものではなく、最後まで興味を深めることがないまま終わってしまった学生もいる。興味のある学生とない学生が混在した状態で授業を進めることになるため、興味のある学生は非常に面白くためになる授業という評価をしたが、そうではない学生は、内容が難しく専門的だと感じたようである。そのような学生はアンケートに感想を記入することはほとんどない。今後は、各機関との連携をより深め、司書の仕事を実感として理解させる構成を心掛けたい。また、必ずしも興味を抱いていない学生に興味を喚起させることができれば望ましい。

2. 教員による評価

この授業の評価は、学修の達成状況(セッションごとの課題+出席・受講態度)に加えて、成果発表(読み聞かせ・展示)を中心に行った。

全体を通したレポートというよりは、テーマごとの理解度を確認するための小課題を幾つか出題した。それぞれの課題については、締め切りを設定し、それを守るという基本的なマナーについても評価の対象とした。

学生の出席率は良好であり、課題の提出もほぼ達成されている。しかしながら、結果を見ると二極化がはっきりと表れている。これは、稚内市立図書館との連携以降に見られる顕著な特徴である。今後は学生の提出した課題の内容分析を行い、次年度以降の授業内容にフィードバックさせていくことで、さらに授業の充実度を高めることが課題となる。

おわりに

本稿では、「地域と図書館」の授業についてその内容を報告した。

この授業は、たんなる講義形式とは異なり、演習を随所に取り入れた実践的な内容である。そのため、1回の欠席が後々の学習に影響を及ぼす。このことから、事前に欠席には注意を要する旨の説明をしていたこともあり、欠席が少なく教育効果をあげるうえで良好な環境作りができた。学生たちは、それぞれの課題に真剣に取り組んだ。図書館員の業務の概要を具体的に把握し、司書が常にスキルアップを求められる専門的な職業であることを理解するというこの授業の目的は、ほぼ達成されたといえる。さらに、今回の法改正の背景にある情報化、電子媒体の取り扱いに関する技術的な面については、本学学生の場合、普段の授業をしっかりと受けていればさほど心配することはなく対応できることがわかった。むしろコンピュータを使って何をするのかということと、情報リテラシーの育成こそが必要な要素である。

残された課題としては、稚内市立図書館との連携調整をより綿密に行うことである。授業の構成とスケジュール調整の結果とが必ずしも順番として整合的ではなく、唐突な印象を与えてしまう回があったことは否めない。時間配分についても再考を要する。特に、分類のセッション、児童サービスのセッションについては、効果的な練習時間を設けることが必要である。そのほか、課題の設定は適切であったかなど、再検討を要する箇所が幾つかある。

この授業が、より専門性を高めた上級学年に担当されている各論的な授業への良い案内役として機能するか否かは今後の追跡調査にまちたい。

最後に、稚内市立図書館との連携授業という、得難い取り組みを実現することができたのは、稚内市教育委員会のご協力があってこそである。稚内市立図書館の皆様には、ご多忙にもかかわらず、本学学生のために貴重な時間を割いていただいた。図書館業務の現場について、大学では知り得ないお話を聞かせていただき、技術を伝えていただいた。図書館員の仕事の魅力や実情を学生たちにリアルティを以て伝えることができた。皆様に心よりの感謝を申し上げます。

●注

- (1) 2005 (平成17)年1月28日に中央教育審議会が発表した答申「我が国の高等教育の将来像」で示された。同答申では、「知識基盤社会」を「新しい知識・情報・技術が政治・経済・文化をはじめ社会のあらゆる領域での活動の基盤として飛躍的に重要性を増す社会」であると定義している。
- (2) 「平成23年度教育行政執行方針」2011 (平成23)年6月13日、稚内市教育委員会 稚内市ホームページ (<http://www.mozilla-japan.org/products/firefox/central.html>) 閲覧2011年12月27日

●主要参考文献リスト

- 岩淵泰朗編著『新現代図書館学講座10 資料組織概説』東京書籍、2008年。
- 岩立志津夫・小椋たみ子編『よくわかる言語発達』ミネルヴァ書房、2005年。
- 黒澤節男『Q&A で学ぶ図書館の著作権基礎知識第2版』太田出版、2008年。
- 黒澤節男『ケーススタディ著作権3 図書館と著作権』著作権情報センター、2010年。
- 塩見昇編著『図書館概論 新訂版 JLA 図書館情報学テキストシリーズ 1』日本図書館協会、2008年。
- 柴田正美『資料組織概説 JLA 図書館情報学テキストシリーズ 9』日本図書館協会、2009年。
- 寺田光孝ほか『図書および図書館史 新図書館学シリーズ12』樹書房、2006年。
- 図書館用語辞典編集委員会編『最新図書館用語大辞典』柏書房、2004年。
- 名柄迪監修・中西家栄子・茅野直子『実践日本語教授法』バベル・プレス、1991年。
- 錦拔豊昭『図書館文化史 図書館情報学シリーズ8』学文社、2006年。
- 日本図書館情報学会用語辞典編集委員会編『図書館情報学用語辞典 第3版』丸善、2007年。
- 堀川照代編著『児童サービス論 JLA 図書館情報学テキストシリーズ 』日本図書館協会、2009年。
- 緑川信之『本を分類する』勁草書房、2001年。
- 村田孝次『教養の心理学』培風社、1994年。
- もりきよし編『日本十進分類法 新訂9版』日本図書館協会、2003年。
- 稚内市立図書館「稚内市立図書館資料収集方針」2004年版 Vol.1.0、2004年8月20日。

●参考 URL リスト

- 国立国会図書館、全文テキスト化実証実験報告書 (「http://www.ndl.go.jp/jp/aboutus/digitization_fulltextreport.html」)
- 法務省法制管理局：法令データ提供システム (<http://law.e-gov.go.jp/cgi-bin/idxsearch.cgi>)
- 「レファレンス協同データベース」(<http://crd.ndl.go.jp/jp/public/>)
- 「稚内市立図書館ホームページ」(<http://www.wakkanai-tosyo.jp/>)

●英文タイトル

Creating a “ Class of the library information science courses ” in cooperation with regional partners: Introduction of “ The Regional and Library ”

●英文要約

Wakkanai Hokusei Gakuen University established a library information science course in 2010. In this course, we have trained librarians and teacher librarian. “ The region and library ” is the introductory subject that students of this course attend first.

The purpose of this class is to grasp the entire duties of librarian. In addition, the characteristic of this class is

the cooperation between university library and the Wakkanai municipal library. In the “knowledge-based society”, the role of public library as a place of life-long education for local residents has been more and more important. In this class we have kept balance between theory and practice. In this paper, we checked the contents of this class and clarified the problems to teach more effectively.

● **Key words**

practical class

cooperation between the public library and university

librarian teaches class

